

暴言暴力の根絶に向けて

豊田 則成

びわこ成蹊スポーツ大学

JBAインテグリティ委員会W.G.

「技術指導」よりも「心の支援」を

- 子どもはコーチを信頼している
- 子どもを保護し癒していく
- 子どもを深く理解する(心の伴走)
- 学び続け、議論し続ける

コーチも苦しんでいる

- 何をどのように苦しんでいるのか、見える化する必要がある
- その苦しみは他の人々を苦しめていることもあるかも
- 時には人を傷つけてしまうことも

体罰否定論 と 体罰肯定論 (教育における体罰の思想)

A. 体罰否定論(体罰はイケナイ！)

- a. 体罰の違法性の観点
- b. 体罰の教育的デメリットの観点
 - 1) 過剰指導としての体罰
 - 2) 暴力の温床としての体罰
 - 3) 信頼関係の損失としての体罰

B. 体罰肯定論(時には必要かも?)

- . 体罰の教育的メリットの観点
 - 4) 精神の鍛練としての体罰
 - 5) 信頼関係の醸成としての体罰
 - 6) しつけとしての体罰

子どもたちは発展途上にある

- 奥行き知覚・動体視力(未完成)
- 周辺視。図と地の分化(未完成)
- 聴覚記憶(コーチからの指示を把握する)
- 聴覚弁別(指示と声援と雑音の聴き分け)
- 相手を打ち負かすことよりも自分のベストを尽くすことを重視する(不安と自信)

**何が起きていているのか
見える化して
継続的に議論する**

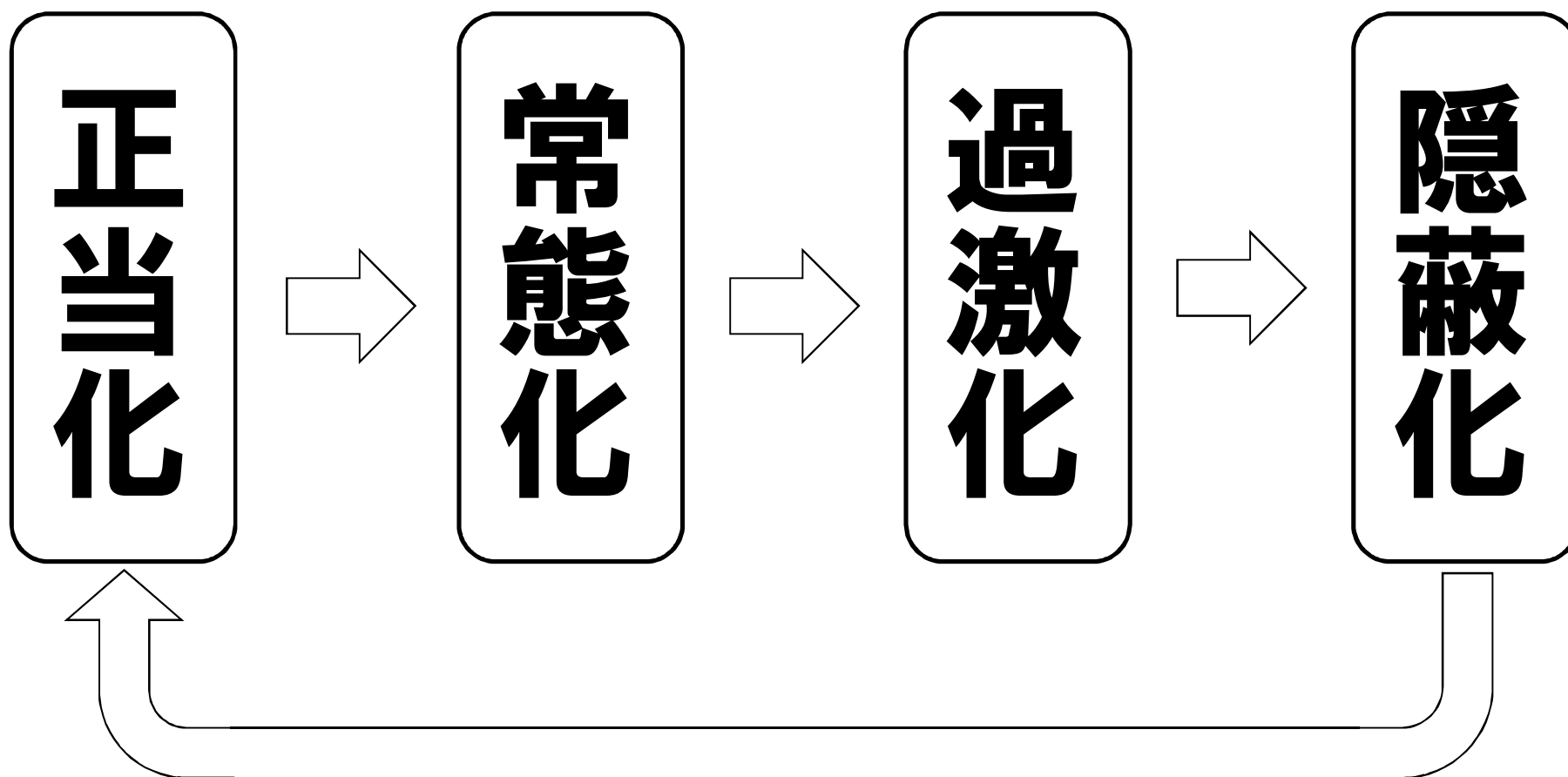


Fig.1 暴言暴力の悪循環

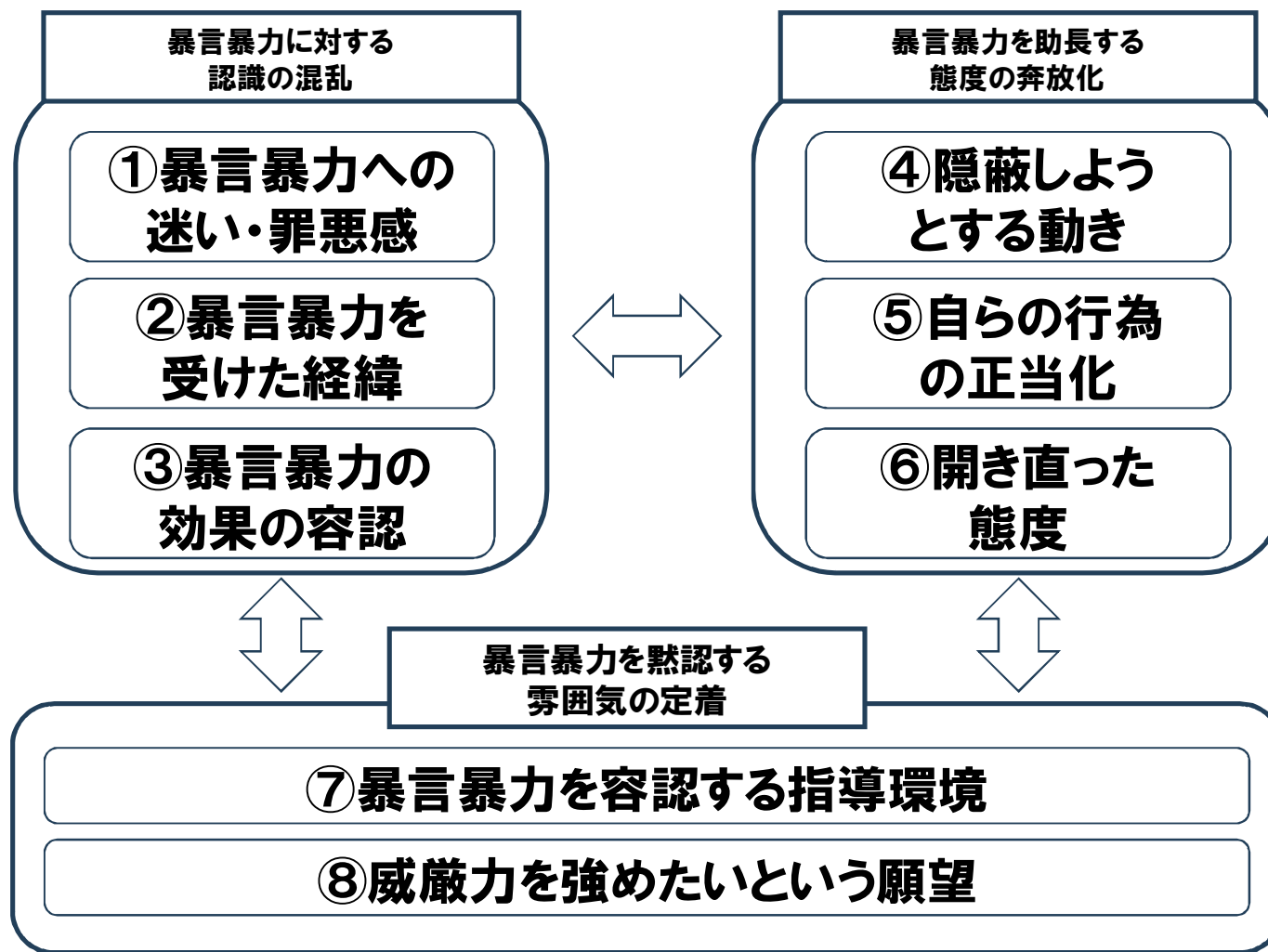


Fig.2 暴言暴力を生み出していくメカニズム

指導者の影響力は大きい！

- 子どもにナメられないようにもっとしめた方がいい？（誤った経験値）
- 力で押さえないと子どもが甘える？
- 指導者の思い通りに子どもを動かす？
- 怯えている子は、一見、従順で、落ち着いているように見える？（勘違いの成功体験）

統率力の 背後で何が起きているのか

- 指導者の一方的な語りが多く、子どもたちが発言できない空気が支配している？
- 多くの子どもたちが黙って高圧的な指導者に従っている？
- 強い叱責、懲罰、締め付けなどの指導
- 指導者の顔色を伺いながら子どもが動く

自身のコトバを振り返ってみる

- 威圧的・高圧的な指導
- 力で押さえつける指導
- 子どもが自信をなくすような強い叱責
- 子ども的人格を尊重しない言動
- 子どもの主體的な行動を妨げるような指導
- 威圧的な指導に頼った子どもの支配

指導者の不適切なコトバ(1)

□ 質問形式で問い詰める

「何回言われたら分かるの？」

「どうしてそういうことをするの？」

「一体、何やってるの？」

「誰に向かって、そんな口のきき方をするんだ？」

指導者の不適切なコトバ(2)

□ 本当の意図を語らず、裏を読ませようとする

「やる気がないなら、やらなくていい」

「もう勝手にすれば」

「好きにすればいいじゃん」

→「やりなさい」「勝手は許さない」

指導者の不適切なコトバ(3)

□ 脅して動かそうとする

「早くしないと〇〇させないよ」

「じゃあ〇〇できなくなるけどいいね」

「もうみんなと〇〇させられないな」

指導者の不適切なコトバ(4)

□ 虎の威を借りる

「お母さんに言うよ」

「お父さんに聞いてこいよ」

「〇〇コーチに怒ってもらおうからね」

指導者の不適切なコトバ(5)

□ 下級生と比較する

「そんなことは1年生もやりません」

「1年生からやり直しな」

「幼稚園に戻った方がいいね」

指導者の不適切なコトバ(6)

□ 指導者側に責任がないことを強調する

「それ、ダメって言ったよね」

「もうやらないはずだったよね」

「さっき約束したばかりだよ」

指導者の不適切なコトバ(7)

□ 見捨てる

「じゃあ、もういい」

「さようなら」

「バイバイ」

子どもを無視してはいないか

励ましや賞賛などをしない

特定の子の指名を避ける

支援が必要な子の合理的

配慮を行わない

必要な指導準備を怠る

取り組むべき課題を放置する

支援が必要な子の指導を他者に丸投げしてしまう

見捨てる言葉「勝手にすれば」「さようなら」を吐く

指導者の不適切なオコナイ(1)

□ 高圧的な指導, 大声で怒鳴る

大人の過度の期待に、子どもが無理矢理に応えさせようとしていないか。

指導成果が実現しない焦りから、高圧的な指導を強いて、子どもが指導者の顔色ばかりをうかがっていないか。威圧によって子どもをコントロールしようとしていないか。

指導者の不適切なオコナイ(2)

□ 目を合わせない、笑いかけない

練習に来て一度も指導者と言葉を交わさずに帰ってしまう子どもはいないか。

指導者は、限られた時間の中で「心の安全地帯」となっているか。目を合わせ、笑いかけることで、「見ているよ」「大丈夫だよ」という安心感を子どもに与えているか。

指導者の不適切なオコナイ(3)

□ 特定の子どもを放置する

一生懸命、指導者にアピールしてきているのに、その子を無視していないか。

子ども「積極性や努力を正しく評価されていない」という気持ちは、心を焦らせ、指導者への不信感へ繋がる。練習の流れに合わないからといって、無視してはイケナイ。

指導者の不適切なオコナイ(4)

□ 活動に参加させない、一方的に練習から排除する

「上手くできないなら見ていなさい」と伝えるのは「指導の放棄」や「排除」を意味する。

苦手さを理解し、スモールステップでの取り組みを重要視し、自信を持って練習に参加するよう導くことが肝心である。

指導者の不適切なオコナイ(5)

□ **必要な賞賛をしない、成長を価値づけない**

「よく頑張ったね」と努力を認め、「できたね！よくやった！」と賞賛することはとても大切である。

子どもの成長に関心を抱く一方、励ましなどの適切な指導を放棄してはイケナイ。

指導者の不適切なオコナイ(6)

□ 必要な情報の提供や共有を怠る

指導内容を他者と共有することを拒むことも「可能性の放棄」につながる。

「自分には自分のやり方がある」は諸刃の剣。確かに、それが功を奏することもあるが、コーチングは社会的な営みである以上、「独善的」「独裁的」であってはならない。

指導者の不適切なオコナイ(7)

□ 子どもの気持ちや心理的な危機に気づけていない

「本来怠ってはいけない危険の察知ができていない」ことも大きな問題である。

危険を放置すること、例えば、熱中症が危惧される中で水分補給を怠ったり、いじめを放置することも絶対にあってはならない。

子どもの理解の守備範囲を広げる

- 子どものちょっとしたミスが許せない
- 対応できないことを子どものせいにする

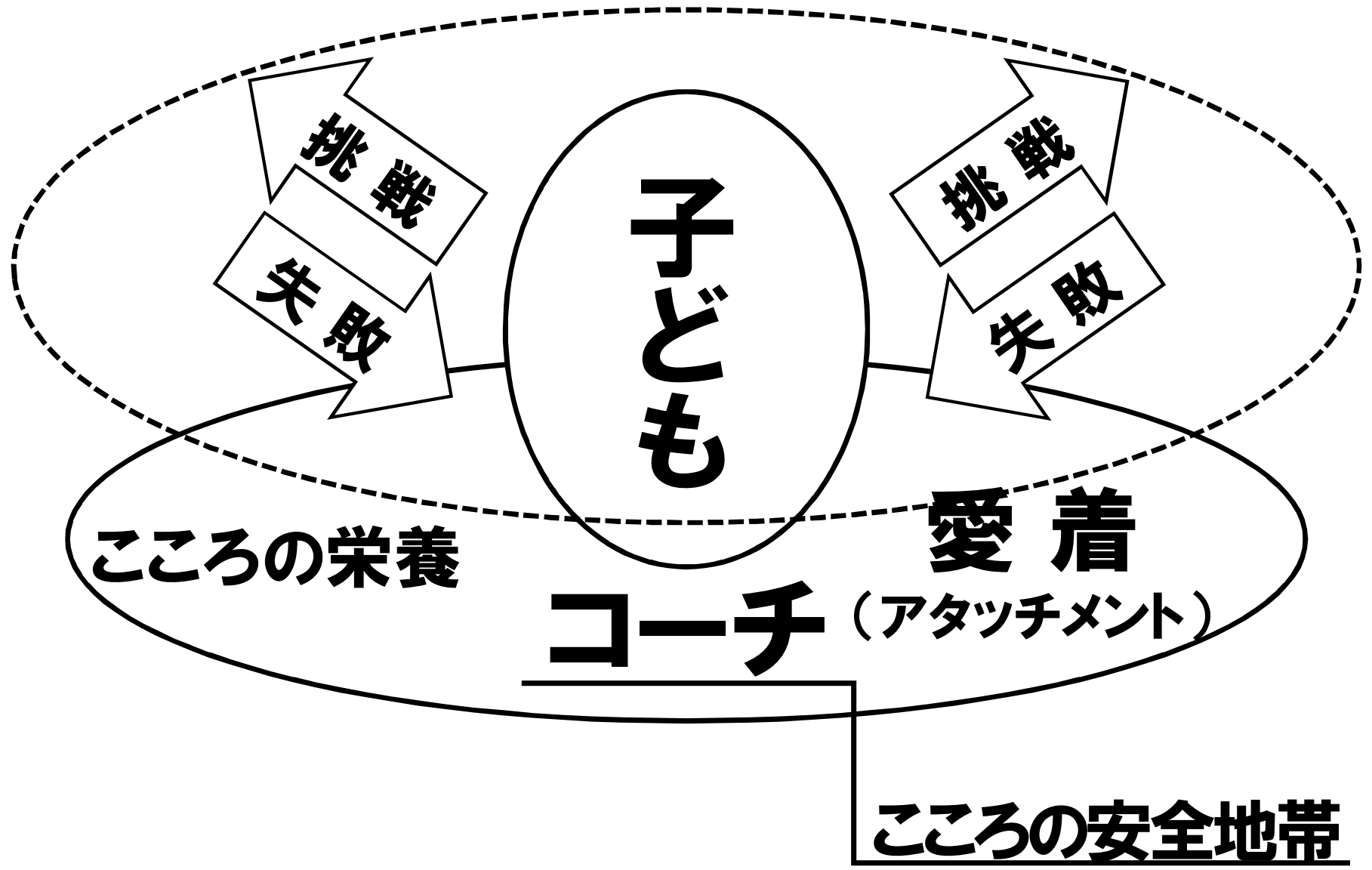


- 子どものちょっとした成長に気づこうとする
- 子どもの成長を何よりうれしく思う
- 子どもが対応できない時こそコーチの出番

愛着(アタッチメント)に着目して

- ジョン・ボウルビィ(1951)
- 子どもは大人との親密な関係性の仕組みによってもたらされる安心感に支えられて外界の活動を安定させ円滑な「かかわり」を構築する。
- 「安全な避難所」「安全な基地」
→ 『心の安全地帯』
- 子どもにとって指導者は「愛着」の対象である。

主体的な探索



こころの栄養

愛着

コーチ (アタッチメント)

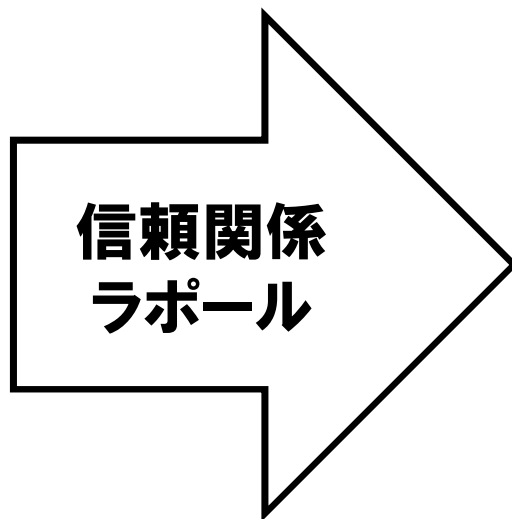
こころの安全地帯

健全な『絆』を深めていく

- 子どもを指導すると同時に、子供からも学ぶという姿勢を有する(相互性)
- 『やる気』を引き出す(動機づけ)
- 押付けるのではなく、子どもと一緒に
なって価値観・文化を作り上げていく

アタッチメントのつくり方

- 目を合わせる
- 笑いかける
- 語りかける
- 触れ合う
- 感謝を伝える
- 努力や過程を認める



自分のことを
気にかけてくれている

↓

自分のことを
分かってくれている

↓

安心して
挑戦することができる

コーチ

教える

学ぶ

子ども

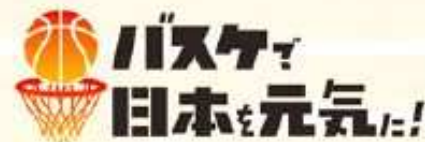
自己を振り返り、改善し続ける！

- 見直すべきは、自分自身だと理解する
- 頭で理解できたとしても、腑に落ちない
- 例え、腑に落ちたとしても、行動できない
- 行動できても、不器用でうまくできない

- 常に自己反省に基づき、体質改善を目指す

※U12カテゴリー「指導行動の指針」のA4版チラシを作成し、JBA公式サイトU12カテゴリーページにて掲載。
(誰でもダウンロード・印刷が可能)

U12カテゴリー「指導行動の指針」



U12カテゴリーから「暴言・暴力」を根絶し、
子どもたちが「楽しく」プレーできる環境をつくるため、
指導者の皆さんには「指導行動の指針」として、つぎのことを意識して、
指導に当たっていただきたいと思います。

皆さんの指導はどうですか？

<やってほしいこと>

- ・ はげます
- ・ 元気づける
- ・ 委ねる
- ・ 引きだす・導く
- ・ 判断させる
- ・ 主体性を育てる



<やってほしくないこと>

- ・ 怒る
- ・ 怒鳴りつける
- ・ 指示ばかりする
- ・ 威圧する
- ・ 判断させない
- ・ 支配する

